

# 偶然性と自由

## CONTINGENCY AND LIBERTY

山縣 弘子

YAMAGATA hiroko

Key words: 偶然性, 自由, 擬人化,

### 目的と方法

慢性病を抱えた人は、以前の生活に戻れる見込みがないまま、生き続けることになる。それは、体の状態に変化が起こってくる、病気の診断局面では、信じなかったことである。やがて、病いをめぐり思い悩みが広がっていき、生きていく限り、解放されないことに気がつき始めるようになる。

本論考では、予測不能の病いの状態が、今よりも悪くならないよう、投薬によって操作されているという様子を、話の軸として展開することを目的とする。その方法についていえば、難病を抱えた私自身の体験を説明するなかで「偶然性のなかに忍び込んだ病いの擬人化」という概念を分析し、“自由の問題”を掘り下げたいと考えている。

### 結果

ジュディス ルーベルは、慢性病への対処を次のように述べている。

「生活はどこおるといふより新たに作り直される。病気をどれほどうまく管理できたとしても、この人の生きる世界と携えている意味は病気によって染め上げられることになる(1)。」

例えば私の場合、再生不良性貧血の患者として、投薬による治療を行うことになってしまった。また、薬の副作用のために胃薬を飲むことにもなったのである。しかし、煩わしく思っていたため、飲まないことがたびたびあった。ある日、胃が痛くなってしまった。すぐに薬を飲むことにしたが、痛みと吐き気に混乱してしまった。私は単に、信じがたい病気であることを忘れるふりをするために、客体である現実の状況から、距離をおこうとしたにすぎなかったのである。だが、突然「停滞した時間」として現れたのである。その結果、「薬との調和を保つことによって、生かされていること」を、つまり病いという、敵との戦いから解放された自由な身体ではなかったことを思い出したのである。さらに、薬の服用を

続けるかぎりでは、はじめて生きる自由を借りれることが、認識できたことによって、制限のなかで生きるというような感覚から、抜けだそうとする逃避の試みこそが、自我最大の防御法であること、それとともに必死の抵抗による攻撃にもなることを、自覚するようになったのである。

このように、今ある生活の内側には、薬に束縛されるしかないという基本設定が潜んでいたといえよう。したがって、薬との関連がなくなるならば、命を落とすだろうという結論が突き付けられることになる。それは、病いへの絶望と尊重の両面が、融合することで生み出された、現実に対する不安感を意識する知覚として捉えられるのである。

### 考察

薬による調整で成り立っている、作られた人生を生き抜く上では、自由があたかも遠くに見える逃げ水になぞらえられる形のように表象されるのである。それ故に、矛盾のなかで形成された束縛を、受け入れるための営みに依拠することを通じて、自由について考察しなければならないだろう。換言すれば、外的な壁を乗り越えようとし続ける、あらゆる努力のなかにこそ、自由を感じることのできる鍵を求める必要がある、ということである。

### 注

- (1) パトリシア ベナー. ジュディス ルーベル (難波 卓志訳) 『現象学的人間論と看護』医学書院, 2000, p. 152.

### 参考文献

- (1) M. メルロー＝ポンティ. (竹内芳郎・木田 元・宮本忠雄訳) 『知覚の現象学2』みすず書房, 2004.
- (2) ベルクソン. (中村文郎訳) 『時間と自由』岩波文庫, 2010.